

実施報告書

HT25097

病を癒す心の力をあぶり出す！？
－ハリの実験で「治療効果の方程式」を考えよう！－



開催日：平成25年8月7日(水)
平成25年8月21日(水)
実施機関：東京有明医療大学
(実施場所) (実習室、附属鍼灸センター)
実施代表者：高倉 伸有
(所属・職名) (保健医療学部・教授)
受講生：第1回 高校生25名
第2回 高校生20名
関連URL：<http://www.tau.ac.jp/outreach/hirameki/2013/takakurarepo.html>

【実施内容】

「鍼(はり)治療」は、補完代替医療・東洋医学的な医療のひとつとしてヨーロッパやアメリカでも普及し、鍼治療の有効性やそのメカニズムに関して、現代西洋医療に基づく科学的な研究が進められています。しかし、「鍼」の経験がある高校生は少なく、「鍼治療」を知っていたとしても、痛そうとか、怖そうとか、効果があるのかとか、ツボって何なのか等、不安や疑問を抱く方も多いかもしれません。本プログラムでは、そんな受講生でもわかりやすく楽しく参加できるように、「鍼」を見て触って刺して感じる、という日常ではできない実習をたくさん取り入れて、最初に「鍼」や「ツボ」について勉強しました。そして「鍼治療」を題材として、サイエンスの目で治療の効果を判定する重要性と、その効果に隠される心の作用について、国際特許の鍼を使った実験などを通じ、本学学生や教員と一緒に考え学びました。

(1) 当日の実施スケジュールと実施の様子

講義担当・実習実験のナビゲーター：高倉伸有
実習実験のナビゲーター：矢鳥裕義・高山美歩
サポーター：(学生)本学鍼灸学科1～4年生の選抜メンバー
(鍼灸師)本学大学院1年生・附属鍼灸センター研修生・研究員

10:10-10:30 受付

10:30-10:50 開講式・オリエンテーション・科研費の説明

実施代表者が、科研費とそれを支える日本学術振興会の説明をし、科研費は大切な税金から支出されていること、受講生の皆さんのような若者たちが、研究を通じて未来を切り拓いていく人材であることをお伝えしました。

10:50-12:00 【講義】「ハリ(鍼)・ツボってなんだろう？」

(休憩含む) 【実習】「ツボを探してみよう!」「ハリを〇〇に刺してみよう!」

午前中は、講義や実習を通じて鍼やツボがどんなものなのかを学びました。そして実際に、鍼の太さを測ったり、サポーターがツボ探しを実演したり(写真1)、受講生が自分でツボを探したり、ユニークな鍼の刺し方の練習法を体験したりしました(写真2)。



写真1 鍼やツボに関する講義



写真2 ツボ探しの実習

12:00-12:50 ランチタイム

12:50-13:10 東京有明医療大学 附属鍼灸センター 見学

本学カフェテリアにてランチタイムをとり(写真3)、サポーターや実施者との交流の時間を持ちました。その後、鍼治療の現場である附属鍼灸センターに行き、施設や治療の見学をしました(写真4)。



写真3 ランチタイム



写真4 鍼灸センター見学

13:10-15:10 【講義】「見かけの治療効果」

(ティータイム含む) 【ディスカッション】「治療効果を高める心の働き」

【ミニ実験】「刺さった？刺さらなかった？実験」

【まとめ】「ハリの治療効果の方程式！？」



写真5 鍼治療の様子(寸劇)



写真6 & 写真7 & 写真8 刺さった？刺さらなかった？実験



午後はティータイムをはさんで、サポーターと実施者による寸劇(写真5)や鍼治療の様子を観察して意見を述べたり、実際に鍼を受けたり鍼を刺したりする実験に全員が参加する(写真6・7・8)など、鍼を題材として医療の臨床実験によって得られる「治療効果の方程式」について考えました。プログラム全体を通じて、学んだことや実施したことはレジュメ(図1)に記録・記入して、成果を確認していきました。

15:10-15:30 修了式・未来博士号授与・記念撮影



写真9(左:8月7日) & 写真10(右:8月21日) 受講生・サポーター・実施者全員で記念撮影

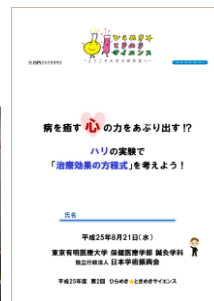


図1 レジュメ(表紙)

修了式では、実施代表者から受講生一人一人に未来博士号(修了証書)が授与され、サクラガーデン(中庭)で記念撮影をして終了しました(写真9・10)。

(2) 受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

- ・ 実習や実験を通じて、数種類の鍼を見て触って刺して感じたり、自分でツボを探したりする体験をしました。
- ・ その他説明する場合には、専門用語を噛み砕いてわかりやすく身近な言葉で伝えるようにし、写真やイラスト、図などで視覚的に情報が得られるように工夫しました。
- ・ 実施当日は、実施協力者と実施協力者の助手(本学学部生・大学院生・研究生・研究生)を[(受講生の)サポーター]と呼称し、受講生の近くで常にサポートできるようにしました。
- ・ 受講生1~2名につき1名の実施者またはサポーターを配置し、実習や実験に積極的に楽しく参加できるよう、また受講生が自由に思いや感覚を表現したり、意見や考えを書いたり述べたりできるよう配慮しました。また、保護者も近くで実習等を見学・体験できるようにしました。
- ・ 実施者とサポーターによる寸劇を取り入れ、内容を楽しく具体的に伝えられるようにしました。
- ・ プログラムのレジュメを作成し、学んだことを書いたり、実習したことを記録したり、考えたことを表現したりできるようにしました。
- ・ 大学に併設する附属鍼灸センターで鍼の臨床の場を見学することによって、鍼治療の実際を知っていただけるようにしました。

(3) 事務局との協力体制

- ・ プログラムの実施にあたり、実施者と、事務局財務部(公的研究支援室)、総務部(広報担当)、情報センターとのミーティングを何度も実施し、広報活動、募集対応、事前準備、当日運営等について綿密な計画を立てて臨みました。
- ・ 財務部(公的研究支援室)は、日本学術振興会との連絡調整や書類確認・提出、委託費の管理、当日の運営サポート等を行いました。
- ・ 総務部(広報担当)および情報センターは、広報活動(下記参照)および当日の運営サポートを担当しました。

(4) 広報活動

- ・ 本学のオープンキャンパス等に参加した高校生に、本プログラムの案内をしました(総務部広報担当・実施者)。これをきっかけに参加してくださったのは、全受講生のうち33%でした。
- ・ 大学案内の請求や進学ガイダンス等のイベントを通じ、それまでに本学と接触のあった高校生約500名に、本プログラムの開催案内をハガキで送付しました(情報センター)。
- ・ 高校の学外授業として高校生が本学に訪れた際に、本プログラムのチラシを全員に配布しプログラムの魅力を説明して参加を働きかけました(実施者・総務部広報担当)。
- ・ 本プログラムのポスターを作成し、高校訪問時に配布し(50校)、高校の進路指導担当の先生に内容を説明し、興味を持っている高校生に告知していただきました(総務部広報担当・実施者)。また、地域の公共施設、ショッピングセンターに依頼し、ポスターを掲示してもらったりチラシを置いていただいたりしました。
- ・ 本プログラムの案内を大学Webページに掲載しました(情報センター)。大学のWebページには約960回のアクセスがあり、ここからの参加申込は全受講生のうち33%でした。
- ・ 大学のWebページに誘導するための広告をインターネットの検索サイト、ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス(Google/Yahoo!/Facebook)に掲載しました(情報センター)。
- ・ 本プログラムの案内を、江東区報(27万8,500部)および近隣の情報誌「東京シーサイドストーリー」(40万部)に掲載していただきました(財務部公的研究支援室・情報センター・実施者)。
- ・ 本プログラムの案内を、学外の進学情報サイト(マイナビ進学等)に掲載しました(情報センター)。
- ・ 日本学術振興会HPからの申込は、全受講生のうち13%でした。

(5) 安全配慮

- ・ 鍼は通常用いる場合には侵襲を与えるものであるため、扱いには十分に注意を促しました。鍼を用いた実習・実験時は、受講生1~2名につき1名の実施者またはサポーターを配置し、いつでも目の届く範囲で行われるよう配慮し(当初の計画よりも増員)、問題なく終了しました。
- ・ 受講生、実施協力者および実施者を対象とした短期の傷害保険に加入しました。体調不良の者が出たときに備え、本学の附属クリニックの医師が診察対応できるよう配慮しました。幸いそのような対象者も出ずに、無事に終了しました。

(6) 今後の発展性・課題

- ・ 受講生確保の方法としては、プログラムの開催前に本学との何らかの密接な交流(オープンキャンパスや進学ガイダンスなど)があった高校生をリクルートしたケースが70%近くを占めました。これは、関東圏の高校生の鍼の認知度が非常に低いことが大きな理由だと考えられます。内容も医療全般にかかるように工夫しているため、鍼を知らない高校生にも鍼治療、補完代替医療の領域を知ってもらい、鍼を通じてサイエンスのおもしろさを感じられる機会となるよう、特に医療全般に関心を持つ受講生を広く募集することが課題であると考えます。
- ・ 対象となる(この分野あるいはプログラムに興味を持つ)高校生に効果的に情報提供し、より発展的なプログラムとして継続的にこの事業を実施していくために、昨年度の反省を生かし、それぞれの広報活動の有効性を分析できる情報や、プログラム中の各内容についての受講生の満足度や理解度の情報を得るための、実施者オリジナルのアンケートを作成し、受講生および保護者に回答していただきました。受講生にとって参加のきっかけとなったキーマンは、高校の先生や友人、家族が多かったことから、キーマンへのアプローチも有効であることが示唆されました。また、ごく少数ではあったが、特に「とても難しい内容だった」「とても簡単な内容だった」「説明がややわかりにくかった」「あまり理解できなかった」「つまらなかった/おもしろくなかった」というような(マイナス)意見への対応も検討する必要があると考えます。

【実施分担者】 矢嵐 裕義 保健医療学部・助教
高山 美歩 保健医療学部・助教

【実施協力者】 第1回 8名 (およびその助手=学内ボランティア 6名)
第2回 9名 (およびその助手=学内ボランティア 3名)
保健医療学部・鍼灸学科 1~4年生、大学院・保健医療学研究科 1年生
附属鍼灸センター・研修生、日本鍼灸理療専門学校・研究生

【事務担当者】 山幡 美沙 財務部公的研究支援室